

# 元禄期寛永通寶の流通動態

川 根 正 教

芸術学部非常勤講師

Circulation of Copper Currency Kan'ei Tsuho during the Genroku Period

KAWANE Masanori

Tokyo Polytechnic University, Faculty of Arts

(Received November 7, 2008 ; Accepted January 10, 2009)

## 1. はじめに

寛永通寶は徳川幕府3代将軍家光によって寛永13(1636)年に発行され、江戸時代を通じ最も普遍的に流通した銭貨である。もっとも、昭和28(1953)年に小額通貨の整理が行われるまでは、寛永通寶が一厘として通用していたことはあまり知られていない。この寛永通寶は流通期間が長く、また東北から九州の各地の銭座で何回にもわたって鑄造されたため、材質、文字形態や直径の大きさなどを基準とした詳細な分類を行うと、その種類は800から1000種にも及ぶといわれている。

古銭研究の歴史は古く、すでに元禄の頃には弄銭家と呼ばれる人々によって、数量の少ない珍しい銭貨が分類・収集されている。古銭学界では、分類した寛永通寶がいくつかの時期のどこの銭座で鑄造されたものか検討が加えられ、例えば寛文期の亀戸銭座で鑄造したと考えられるものを、寛文亀戸銭などと呼称している。しかし、寛永通寶の大半の種類は、鑄造時期、鑄造場所が明らかになっていないのが現状である。また、鑄造量や流通状況などもほとんど解明されていないなど、寛永通寶は江戸時代の普遍的な銭貨であると同時に、謎の多い銭貨でもある。

1980年代に入り、大規模な開発に伴う発掘調査が実施されるようになると、寛永通寶も近世考古学の貴重な研究対象資料として扱われ、鈴木公雄など先学のすぐれた業績が示すように、寛永通寶の研究が深化されてきた<sup>1)</sup>。最近では年代が特定できるような新発見資料も少しずつではあるが蓄積され、考古学・文献史学・経済学・古銭学・自然科学などによる学際的な研究活動が行われている。

本稿は、下限年代が元禄16(1703)年と特定できる東京大学構内の遺跡「工学部14号館地点」から一括出土した寛永通寶を研究対象とする。その中から元禄期寛永通寶を抽出して型式学的な分類<sup>2)</sup>を行い、分類した各型の

江戸・堺・博多における分布状況を検討し、元禄期寛永通寶の流通動態の一端を明らかにしてみたい。

## 2. 寛永通寶の鑄造時期

寛永通寶は、中世から貨幣経済を担ってきた中国などの渡来銭に替わって、金貨・銀貨に遅れること35年、寛永13年に初めて発行された。その後は急速な貨幣経済の浸透に伴う銭貨不足に対応するため、数次にわたって鑄造発行されている。文献に記録されている銭座の存在及びその鑄造期間をみると、寛永通寶は寛永13年から慶応4(1868)年まで鑄造されており、鑄造時期をⅠ期からⅩ期に整理することができる。ここではⅠ期から、本稿が対象とする元禄期、すなわちⅢ期までの銭座及びその鑄造期間を検討する(表1)。

Ⅰ期の銭座は『御触書古二』<sup>3)</sup>・『憲教類典抄二』<sup>4)</sup>・『銭録』<sup>5)</sup>などに記録されており、鑄造期間は寛永13年から万治2(1659)年頃とされる。この期間は寛永13年から寛永17(1640)年頃のⅠa期と、明暦2(1656)年から万治2年頃のⅠb期の2小期に分けられる。江戸では明暦3(1657)年の大火に伴う堆積層が確認されており、Ⅰa期とⅠb期の一部の寛永通寶については層位的に分類できる可能性がある。

Ⅱ期の銭座は『国家金銀銭譜』<sup>6)</sup>・『三貨図彙』<sup>7)</sup>・『貨幣通考』<sup>8)</sup>などに記録がみられ、鑄造期間は寛文8(1668)年から天和3(1683)年頃と考えられる。

次のⅢ期が、元禄期・宝永期の鑄造時期に該当する。この時期の銭座は『三貨図彙』・『寛永銭譜』<sup>9)</sup>・『貨幣通考』などに記録がみられる。元禄10(1697)年から正徳2(1712)年頃に鑄造されており、元禄10年から宝永元(1704)年頃までのⅢa期、宝永5(1708)年から正徳2年頃までのⅢb期の2小期に分かれる。この小期の間には宝永4年の富士山噴火に伴う火山灰層の堆積があり、年代を検討するうえで良好な指標となる。

表1 錢座と鑄造期間

鑄造時期	錢座名	御触書 延享元(1744)	国家金銀錢譜 延享3(1746)	憲教類典 寛政年間	三貨図彙 文化12(1815)	錢録 文政10(1827)	寛永錢譜 文政11(1828)	貨幣通考 安政3(1856)
Ia	寛永浅草橋場	寛永13	寛永13		○	寛永13～17	寛永13～明暦	寛永13
	芝網縄手				○	寛永13	寛永13	
	坂 本	寛永13				寛永13	寛永13	寛永13
	水 戸			寛永14		寛永14～17		
	仙 台			寛永14		寛永14		
	吉 田			寛永14		寛永14	寛永13	
	松 本			寛永14	○	寛永14	寛永13	
	高 田			寛永14		寛永14		
	長 門			寛永14		寛永14		
	岡 山			寛永14		寛永14		
	竹 田			寛永14		寛永14		
	井 之 宮					寛永16	寛永13	
Ib	明暦鳥 越					明暦2		
	沓 谷					明暦2		
II	寛文亀 戸		寛文年間		寛文8		寛文3～天和3	寛文年間
IIIa	元禄亀 戸				元禄10～宝永元		元禄4	元禄末～宝永
	七 条				元禄4～6・13		元禄12	
IIIb	宝永亀 戸				宝永5～正徳2		宝永5～正徳4	

### 3. 元禄期寛永通寶の特定

I期・II期・III期の錢座で鑄造されたと考えられる寛永通寶の型は、従来から古錢学によって比定されてきており、これらの研究者が編纂したいわゆる錢譜と呼ばれる書では、様々な見解が示されている。しかし、いずれの錢譜もその根拠を明らかにしていないことから確証がない。そして、これに基づく寛永通寶各型自体の年代的位位置についても、疑問が生じてくることになる。筆者は前稿において、年代の確実な考古学資料を集成し、I期からV期に鑄造された寛永通寶を検討し編年した<sup>10)</sup>。

I様式の寛永通寶は、神奈川県追分遺跡<sup>11)</sup>・福岡県太宰府天満宮参道一の鳥居出土例<sup>12)</sup>や千葉県八木ヶ谷遺跡3号塚出土例<sup>13)</sup>から、古寛永錢と呼称される各型が比定される。II様式の寛永通寶は、追分遺跡・太宰府天満宮参道一の鳥居出土例のうち背に「文」字を有する、いわゆる文錢が比定される。

本稿が対象とするIII様式の寛永通寶は、『貨幣通考』に「形文錢より小薄、位甚だ劣れり」とある。元禄期は幕府の財政状況が窮乏化したため、元禄2(1689)年に勘定吟味役、元禄9(1696)年に勘定奉行となった荻原重秀の貨幣政策によって低品位の寛永通寶が鑄造され、一般に荻原錢と呼びならわされている。宝永火山灰層の

堆積する以前の元禄期に鑄造されたIIIa様式寛永通寶として、東京都増上寺子院群<sup>14)</sup>・東京都御殿下記念館地点<sup>15)</sup>出土例から、広永型・勁永型・正字型・小字型・草点永型・跳永型・俯頭𠂔型の各型を前稿では比定した。

古錢学では、上述の各型のうち草点永型を荻原錢に比定しており、広永型・勁永型・跳永型・俯頭𠂔型は四ツ宝錢という総称を付し宝永期に、正字型・小字型は猿江錢座で鑄造されたものとして元文期に位置づけている。しかし、前述した発掘調査による出土例から検討すれば、これらの各型が元禄期寛永通寶であるのは明らかといえよう。ただし、跳永型・俯頭𠂔型は元禄16年を下限とする工学部14号館地点からは出土していないことから、この2つの型については本稿でIIIb期とする宝永期鑄造の寛永通寶とらえておく。

元禄期に鑄造された寛永通寶として検討しなければならないものに、不旧手と呼称される一群の錢貨がある。これは、多くの寛永通寶が通字の頭を「コ」につくるのに対し「マ」につくるもので、京都糸割符年寄長崎屋不旧の書になることから不旧手といわれている。従来、この不旧手は享保期から元文期にかけて鑄造されたものとして、位置づけられてきた。この寛永通寶も御殿下記念館地点や工学部14号館地点の出土例から、元禄期を初鑄とすることはほぼ確実である。

#### 4. 寛永通寶の鑄造量

寛永13年に初めて発行された寛永通寶は、その後の幕府の貨幣政策によって増鑄が繰り返し行われる。寛永通寶の流通状況を検討するうえで鑄造量を理解することは重要である。

鑄造量を把握する資料として、『錢録』・『折たく柴の記』<sup>16)</sup>などの諸文献に記録された総吹高や歳額があるが、記録に残されているのは一部に限られており、記録のないものは他座の状況などから推定した今西嘉寿知の数値を用い<sup>17)</sup>、表2にまとめた。

表2 各期の鑄造量

鑄造時期	鑄造量	註
Ia 期	275万貫文	17
Ib 期	50万貫文	5
II 期	197万貫文	16
IIIa 期	160万貫文	17
IIIb 期	40万貫文	17

#### 5. 工学部14号館地点出土寛永通寶の分析

##### (1) 遺跡の位置と概要

ここで分析対象とする寛永通寶は、東京大学大学院工学系研究科・工学部14号館の新営に伴う発掘調査によって検出された資料である<sup>18)</sup>。遺跡は東京都文京区本郷7丁目3番1号東京大学本郷構内に所在し、標高約21mの本郷台地上に占地する。江戸時代、本郷構内が加賀藩邸を中心とする大名藩邸であったのに対し、本地点は御

先手鉄砲組屋敷として土地利用されている。発掘調査は平成4（1992）年11月から翌5年2月まで実施され、調査対象面積は1,785 m<sup>2</sup>である。

調査の結果、江戸時代から明治43年までに帰属する地下室18基、井戸11基、土坑210基、ピット219基、柱穴列4基、性格不明遺構2基が検出された。

18基検出された地下室のうちの1基であるSU335から、100枚前後を一括りとするさし銭の状態で寛永通寶など401点が出土し、火災に伴う後片付けのために焼土とともに廃棄されたものと考えられている。火災は共伴している陶磁器から元禄16（1703）年に比定されており、下限年代が明らかな貴重な資料である。これらの寛永通寶については小林茂之や大貫浩子による分類・考察が既に行われており<sup>19-20)</sup>、本稿ではこうした成果を援用しながら分析を加えていくことにする。

##### (2) 元禄期寛永通寶の抽出

SU335から出土した寛永通寶はさし銭の状態出土しており、元禄16年すなわち本稿でIIIa期とする時期に一括廃棄されたものである。したがって、その時点で流通していた渡来銭、I様式・II様式・IIIa様式の寛永通寶を含む。渡来銭、I様式すなわち古寛永銭、II様式すなわち文銭を除き、広永型・勁永型・勁永広寛型・猿江正字型・猿江小字型・草点永型・不旧手がIIIa様式すなわち元禄期寛永通寶として抽出できる（図1）。これらの型は、3節で元禄期寛永通寶として特定した筆者の見解と一致する。

##### (3) 各様式の組成割合

SU335から出土した寛永通寶は、渡来銭6点、I様式84点、II様式46点、IIIa様式265点に大きく分類される。

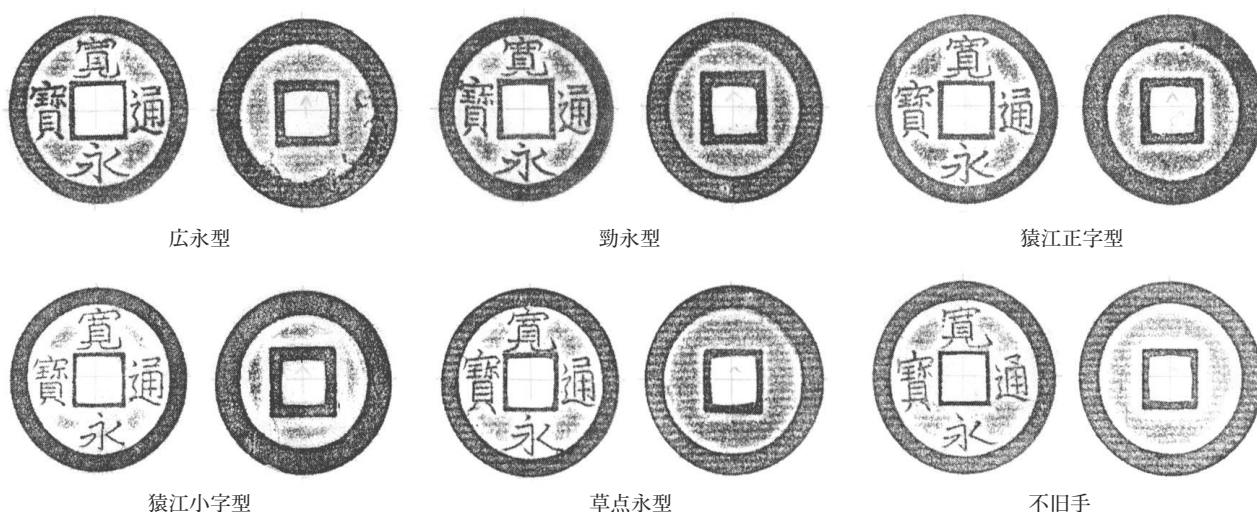


図1 元禄期寛永通寶の各型（『穴銭入門 寛永通寶』から作成）



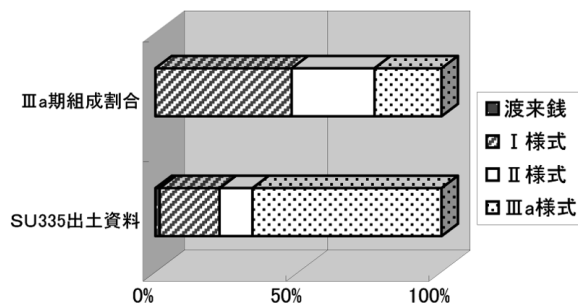


図2 各様式の組成割合

この組成割合は元禄16年における銭貨の流通状況を示す資料でもある。

各時期の鑄造量から算出した、IIIa期における各様式の理論上占める割合と、SU335出土資料を比較すると、本資料は元禄期の寛永通寶、すなわちIIIa様式が圧倒的に多いことが特徴として指摘できる。本遺跡における銭貨の流通状況を示すものとして、検討しなければならない課題である。

#### (4) IIIa 様式の各型の組成割合

IIIa 様式の寛永通寶265点を型別にみると、広永型89点、勁永型63点、勁永広寛型102点、猿江正字型3点、猿江小字型5点、草点永型1点、不旧手2点である。勁永広寛型は、勁永型と文字形態が微細な点で異なる細分類の型であり、細分しても無意味であるため、本稿では両者ともに勁永型として扱う。また前述したように、従来から古銭学によって元禄期荻原銭とされてきたものは草点永型で、広永型・勁永型は四ツ宝銭として宝永期に

位置づけられてきている。

265点のうち、各型の占める割合をみると広永型が34%、勁永型が62%、その他が4%で、本資料の量的主体となるのは四ツ宝銭と呼称されてきた広永型・勁永型である。従来から荻原銭に比定されてきた草点永型はわずか1点の出土であり、猿江正字型・猿江小字型・不旧手は量的に少ないことが明確である(図3)。

元禄期に鑄造発行されたいわゆる荻原銭の鑄造量が160万貫文と大量であることを考慮すれば、広永型・勁永型が江戸亀戸銭座で鑄造された荻原銭とするのが、妥当なものと考えられる。

## 6. 元禄期寛永通寶の分布状況

SU335出土資料の分析の結果、広永型・勁永型は元禄16年時点における流通銭貨の主体であるとともに、元禄亀戸銭座で鑄造された荻原銭であると推測される。この広永型・勁永型がどのような分布状況をもつものか、他地域の出土例を検討していきたい。また、元禄期には京都七条銭座でも鑄造発行されたとの記録があり、この銭座で鑄造されたと考えられる寛永通寶についても検討を加えることにする。

### (1) 増上寺子院群出土の寛永通寶<sup>21)</sup>

増上寺子院群は、東京都港区芝公園1丁目5及び8に所在する。港区新庁舎建設工事に伴い、行政棟部分のA地区は昭和59年7月から昭和60年3月まで、議会棟部分のB地区は昭和60年4月から同年10月まで発掘調査が実施された。

増上寺は、徳川家の保護のもとに江戸時代から現在に

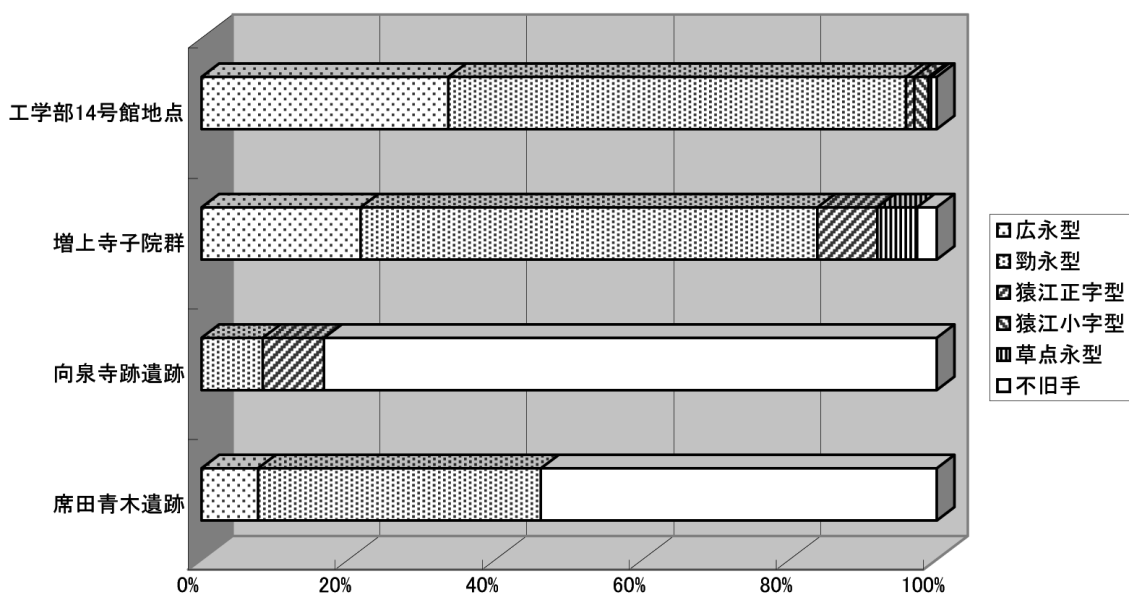


図3 IIIa 様式各型の分布状況

至るまで有力な寺院として存続し、A地区はその子院群のうち光学院・貞松院の跡地にあたる。調査の結果、埋葬施設181基や寺院建築跡が検出されている。B地区は増上寺子院群のうち源興院の墓地跡にあたり、調査の結果、埋葬施設259基が検出されている。B地区は遺存状態が良好で、埋葬施設の年代を知る上で重要な指標となる宝永火山灰層が検出されている。B地区259基の埋葬施設のうち、宝永火山灰層を切って構築しているのは2基だけで、それ以外はすべて宝永火山灰層の堆積年代より古い時期のものと推定されている。本稿では、年代が特定できるB地区から出土しているⅢa様式の寛永通寶を抽出し、分類を行った。

その結果、BM-56・61・71・109・114・119・133・186・188・215からⅢa様式の寛永通寶37点が出土しており、内訳は広永型8点、勁永型23点、猿江正字型3点、草点永型2点、不旧手1点である。各型の占める割合をみると広永型が22%、勁永型が62%、猿江正字型が8%、草点永型が5%、不旧手が3%で、主体となるのは工学部14号館地点と同様に四ツ宝銭と呼称される広永型と勁永型であり、猿江正字型・草点永型・不旧手は僅少である(図3)。

## (2) 向泉寺跡遺跡出土の寛永通寶<sup>22)</sup>

向泉寺跡遺跡は、大阪府堺市榎元町5丁334番地-3に所在する。発掘調査は平成6年7月から同年11月まで実施され、調査対象面積は約442m<sup>2</sup>である。

向泉寺跡は近世墓地跡として知られており、調査の結果、蔵骨器墓467基、円形木桶墓1基、土壇墓6基などが検出されている。本稿では、六道銭として副葬された寛永通寶のうちⅢa様式を抽出し、分類を行った。

その結果、S1027・1156・1187・1377からⅢa様式の寛永通寶が12点出土しており、内訳は勁永型1点、猿江正字型1点、不旧手10点である。各型の占める割合は、勁永型が8%、猿江正字型が8%、不旧手が84%で、出土点数が少ないとはいえ不旧手が主体となり、勁永型・猿江正字型は僅少である。また、広永型・草点永型などは出土していない(図3)。

もう一つの課題である京都七条銭座で鑄造されたⅢa様式の寛永通寶は、堺でこのような状況から不旧手である可能性が高いことを指摘しておきたい。

## (3) 席田青木遺跡出土の寛永通寶<sup>23)</sup>

席田青木遺跡は、福岡県福岡市博多区空港前3～5丁目、青木1～2丁目に所在する。土地区画整理事業に伴い、平成4年4月から同年10月まで発掘調査が実施された。調査面積は5,360m<sup>2</sup>である。調査の結果、弥生時代・古墳時代の墳墓、中世城跡とともに近世墓が検出されている。近世墓は第2区で261基、第5区で306基が検出さ

れ、六道銭として713点の銭貨が副葬されている。本稿では、これらの六道銭のうち図示されたものを対象としてⅢa様式の寛永通寶を抽出し、分類を行った。

その結果、265号墓・305号墓・313号墓・336号墓・387号墓からⅢa様式の寛永通寶13点が出土しており、内訳は広永型1点、勁永型5点、不旧手7点である。各型の占める割合は、広永型が8%、勁永型が38%、不旧手が54%で、主体となるのは不旧手と勁永型である。銭貨一覧表によれば不旧手は31点の出土が報じられており、不旧手が主体となる可能性はあるが、広永型・勁永型も図示された以外に存在することが考えられ、ここでは上述した割合としておく(図3)。

博多では、京都七条銭座で鑄造された不旧手と、江戸亀戸銭座で鑄造された広永型・勁永型がほぼ同じ割合を示している。

## 7. 元禄期寛永通寶の流通動態の考察

ここまで、江戸・堺・博多の出土例を取り上げ、元禄期に鑄造されたⅢa様式寛永通寶の各型の分布状況を検討してきた。

幕府は寛永13(1636)年に初めて寛永通寶を発行し、さらに寛文10(1670)年には渡来銭の通用を禁止して、ここに新しい時代の経済活動に相応しい寛永通寶を中心とした銭貨制度を確立した。寛永通寶の発行当初は円滑な流通を図るための政策が幕府によってとられたとされ<sup>24)</sup>、このことはⅠ様式・Ⅱ様式の寛永通寶が全国的に分布するという考古学的視点からも首肯される。

Ⅲ期以降の寛永通寶は、貨幣経済の浸透による銭貨不足に対応するために鑄造発行される。元禄期には江戸と京都で銭貨不足から銭相場が高騰し、江戸亀戸銭座と京都七条銭座で寛永通寶が増鑄された。江戸に所在する工学部14号館地点及び増上寺子院群では広永型・勁永型が主体となっており、この2つの型が江戸に供給することを目的に亀戸銭座で鑄造されたものと考えられる。

一方、検討した資料点数は少ないが、堺に所在する向泉寺跡遺跡では不旧手が主体となっており、江戸で鑄造されたであろう広永型・勁永型は僅少である。こうした分布状況を見ると、不旧手は西国方面に供給することを目的に、京都七条銭座で鑄造された可能性が指摘できる。博多に所在する席田青木遺跡では江戸や堺と異なり、不旧手が上回るものの広永型・勁永型も次いで主体となる。

以上のように、Ⅲa様式の分布状況には、地域性が認められる。その背景として、Ⅲa期の寛永通寶は銭相場が高騰している江戸や京都・大坂に集中的に供給されたこと、江戸では銭貨不足がつづき他国への銭両替が禁止

されたこと<sup>25)</sup>をあげることができる。元禄期における寛永通寶の分布状況に地域性が現れることは、幕府の貨幣政策が反映された結果であると理解されよう。

## 8. おわりに

本稿は寛永通寶の特定の型の分布状況を検討することから、元禄期寛永通寶の流通動態を明らかにしようと試みたものである。一定の成果をあげることができたが、資料不足であったことも否めない。今後、各地域において資料が増加することを期待したい。

## 註・参考文献

- 1) 鈴木公雄『出土銭貨の研究』東京大学出版会 1999
- 2) 本稿では、寛永通寶の分類単位として型 (pattern)・型式 (type)・様式 (style) を設定し、型は彫母銭を同一とするもの、型式は複数の型から構成され同一銭座で鑄造されたもの、様式は同一時期に鑄造されたものと規定する。
- 3) 『御触書古二』(大蔵省編纂『日本財政経済史料』巻二 1922 復刻版 小宮山書店 1971 558-559頁)
- 4) 『憲教類典抄二』(大蔵省編纂『日本財政経済史料』巻二 1922 復刻版 小宮山書店 1971 560頁)
- 5) 近藤守重『銭録』1827 (『近藤正斎全集』第三 第一書房 1976)
- 6) 青木昆陽『国家金銀銭譜』1746 (『吹塵録』『勝海舟全集』勁草書房 1974)
- 7) 草間直方『三貨図彙』1815 (復刻版 文献出版 1978)
- 8) 羽田正見『貨幣通考』1856 (『吹塵録』『勝海舟全集』7 勁草書房 1974 438頁)
- 9) 稲垣尚友『寛永銭譜』1828 (愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫蔵本)
- 10) 川根正教「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会 2001
- 11) 青木健二・足立吉弘『保木遺跡群』日本窯業史研究所 1989
- 12) 山村信榮ほか『太宰府天満宮参道』福岡県太宰府市教育委員会 1993
- 13) 今泉潔『船橋市八木ヶ谷遺跡 (遠山塚群)』(財)千葉県文化財センター 1984
- 14) 港区芝公園1丁目遺跡調査団『増上寺子院群』東京都港区教育委員会 1988
- 15) 東京大学埋蔵文化財調査室編『山上会館・御殿下記念館地点第2分冊御殿下記念館地点の調査』東京大学 1990
- 16) 新井白石『折たく柴の記』享保年間 (神宮司庁『古事類苑泉貨部』吉川弘文館 1984 26頁)
- 17) 今西嘉寿知「第二章 近世幣制の成立」『図録 日本の貨幣』2 東洋経済新報社 1973 210頁
- 18) 東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室 2006  
本書に掲載された拓影は3分の2であるため、東京大学埋蔵文化財調査室、堀内秀樹氏から原寸大の拓影の提供をいただいた。記して、謝意を表したい。
- 19) 小林茂之「元禄期の遺構から出土した寛永銭について (上) (下)」『貨幣』第49巻第2・3号 日本貨幣協会 2005
- 20) 大貫浩子「江戸時代の貨幣流通についての一考察」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室 2006
- 21) 港区芝公園1丁目遺跡調査団『増上寺子院群』東京都港区教育委員会 1988
- 22) 嶋谷和彦「向泉寺跡遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第59冊 堺市教育委員会 1996
- 23) 櫻木晋一「席田青木遺跡の六道銭」『席田青木遺跡』1 福岡市教育委員会 1993
- 24) 鈴木公雄「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』第53巻第6号 1988
- 25) 滝沢武雄『日本の貨幣の歴史』吉川弘文館 1996 133頁